

史上最高のラブ・リベンジ

プロローグ 天国と地獄

【サクラちゃん、彼にプロポーズされました。  
幸せ過ぎて、天にも昇る気持ちです。 絵梨】

制作会社である株式会社ストロボ企画。その企画部に籍を置く逢坂絵梨は、行きつけのカフェに残した知人宛のメッセージを思い出し、慌てて両手で頬を押さえた。  
そうしていないと、自然と頬がニヤけてしまうからだ。

十一月に入り、冬と呼んでもいい寒さが続いているはずなのに、今は上着を脱ぎたくなくなるくらいに頬が火照っている。

——だって、好きな人にプロポーズされたんだもん。  
これが喜ばずにいられようか。

だが、まだ周囲の人にこの喜びを悟られるわけにはいかない。  
自分のデスクに両肘をつけて頬を包み込む絵梨は、一人でニヤニヤして変に思われていないか心配になり周囲を見渡した。

ただ他の社員も、絵梨ほどではないが、少なからず笑み崩れているので大丈夫そうだ。

絵梨は同僚たちの相好を崩す様に、納得をする。

——皆、嬉しいよね。

何故なら、先ほど超一流企業のCM制作をかけたコンペティションで、我が社の企画が採用されたという連絡があったからだ。ストロボ企画のような中堅の制作会社にとって、またとないビッグビジネスのチャンスに、企画部の社員全員で喜びを分かち合っている。

「まさか殿春総合商社のCMを、ウチが取れるとは思わなかったぜ」

そう声をかけてきた男性社員に、絵梨は笑みを浮かべてピースサインを返す。

かくいう絵梨も、この企画にはサポートとして参加していた。

殿春総合商社の歴史は古く、設立は明治にまで遡る。当時は筑紫乃商会という社名で、明治維新以降、貿易事業を足がかりに天然ガスや石油燃料の資源開発を手がけて大きく成長した超一流企業だ。

その殿春総合商社が、社名を現在のものに改めて五十年となる節目に、いくつかの記念プロジェクトを立ち上げた。その中の一つがCM制作だ。

普通なら、そんな大きな案件がストロボ企画のような中堅制作会社に回ってくることはない。しかし、殿春総合商社はCM制作を任せるにあたり、コンペティション形式で多くの企業に門戸を開いたのである。

そして今日、名のある大手企業も参加したコンペティションの中から、我がストロボ企画の案が

採用されたと、この件を統括する安達部長から知らされたのだ。

もちろん絵梨も、自分の携わった企画が大手企業に採用されたことは素直に嬉しい。でもそれ以上に、絵梨にとって、今回のコンペティションで自社の企画が採用されたことには特別な意味があった。

今回のコンペティションに携わっているメンバーの中には、絵梨の恋人である比留川一樹も含まれる。

二十五歳の絵梨より五歳年上の比留川は、今回のコンペティションに並々ならぬ意気込みを持って取り組んでいた。

プライドが高く負けず嫌いの彼は、どうしてもこのビッグチャンスを自分のものにしたかったらしい。

その意気込みを示すかのごとく絵梨に、「今回のコンペティションで、ウチの企画が採用されたら結婚しよう」と、プロポーズしてきたのだ。

そして「契約が取れたら、その場で皆に婚約宣言するから」と絵梨に話し、絵梨に全力でのサポートを求めてきた。

絵梨としても、好きなCMの仕事に携われるのは嬉しかったし、好きな人の役に立てるのもとても幸せなことなので、比留川の希望に添うべく全力でこの企画に取り組んできた。

その結果、絵梨が立てた企画と言っても過言ではないほど、プランから絵コンテ作り、予定キャストのスケジュールの仮押さえまで、絵梨が担う結果になってしまった。

そこまでしても自分の名前が表に出ないことは承知していた。だが、たとえ名前が残らなくても、それが比留川との未来に繋がっているならそれでいい。

——大変だったけど、頑張った甲斐があったな。

今までの苦勞をしみじみと噛みしめていたら、誰かに肩を叩かれた。

顔を向けると、隣のデスクに座る三輪郁美が、背中を椅子の背もたれに預けて絵梨の顔を見ている。

「逢坂さん、嬉しいのはわかるけど、ちょっと顔緩みすぎ……」

仕事場で一番仲のいい郁美の遠慮のない表情から察するに、絵梨はさうとうニヤけた顔をしていたようだ。

「……はは」

比留川との関係は、彼の要望もあって社内ではずっと秘密にしてきた。だから、今はまだ郁美にも話すわけにはいかない。

とりあえず、このふやけきった顔をどうにかしてこよう。

絵梨は「ごめん、ちょっとお手洗い」と、席を立ち、廊下へと出た。

「あつ、絵梨ちゃん」

廊下に出てすぐ、鼻にかかった声に呼び止められた。

その甘えた声の主にピンときて、幸福感でいっぱいだった絵梨の頭が一瞬で冷静になる。

「安達さん……どうかした？」

無視するわけにもいかず笑顔を作って振り向くと、案の定、最近同じ部署に異動してきたばかりの安達桃花の姿があった。

絵梨と目が合うと、桃花は栗色の長い髪を耳にかけ、グロスに濡れた唇をほころばせた。

小柄で色白な桃花は、若手の男性社員の間では無垢な天使のようだと人気が高い。確かにこういった表情は、同性の絵梨でも可愛いと思った。

「やだ。桃ちゃんでいいのに」

近付かれると、甘ったるい声と同じくらい、甘い香水の匂いが嗅覚を刺激してくる。

——名前にちゃん付けて……

ここは女子校か、と、眉をひそめたくなるのをぐっと我慢する。

若手男性社員の評価とは裏腹に、女性社員の間では、桃花はすこぶる評判が悪い。

ワガママで自己中心的。自慢好きで、ブランド好き。人の傷付く発言を平気でする子……。そういった悪評を、彼女が異動してくる前から耳にしていた。そして同じ部署で働くようになったことで、それが根も葉もない噂ではないことを理解する。

絵梨としても、桃花の勤務態度を窘めたいと思ったのは一度や二度ではない。

だが面倒なことに、彼女は安達部長の愛娘なのだ。

噂によると、縁故で入ったが労働意欲の薄い桃花をどの部署も持て余し、巡り巡って父親である安達部長に押しつけたらしい。

「会社なので、ちゃん付けはちょっとどうかと……」

やんわり断る絵梨に、桃花は軽やかに笑う。

「やだあ、パパが部長だからって、私にそんなに恐縮しなくていいわよ。もっとフランクに話しかけて」

——恐縮？ それに、フランクって……

同じ平社員。むしろ絵梨が彼女の一年先輩に当たる。それなのに桃花は、自分の方が絵梨より格が上だと信じて疑わない。

別に一年先に入社しただけで先輩面をするつもりはないけど、部長の娘というだけでここまで上から目線でこられると、さすがにモヤツとしてしまう。

でもそういう一般常識を説いたところで、桃花は「そんなつもりじゃなかったのに……」と、大袈裟に落ち込み、男性社員の同情を誘う。その結果、正論を口にした側が気まずい思いをすることになるので、関与しないのが一番なのだ。

ここは、桃花の言うことなのだからと割り切って、すぐに気持ちを切り替える。

「で、安達さん、なんか用事？」

さすがに、名前の呼び方について議論するために自分を追いかけて来たとは思えない。

そう思い、用件を確認する絵梨に、桃花が「そうそう」と、笑顔で軽く手を叩いた。

「今回の殿春総合商社のコンペティション、絵梨ちゃんがすごく頑張ってくれたんだってね。ありがとう」

「ああ……いえ……」

突然、お礼を言われて戸惑う。そしてすぐに、「ん？」と、首をかしげた。

確かに絵梨は比留川のアシスタントとして今回の企画に参加していた。だが、コンペティションのサポートをしていたことは、絵梨と比留川、二人だけの秘密のはず。

安達部長でさえ知らないはずの話を、何故桃花が知っているのだろうか。

「それに、なんだかごめんさい」

「え、なにが？」

「秘密。……ただ、謝っておきたくなったの」

ふふふっと、桃花が目を細めて意味ありげに笑う。そして「じゃあね」と、小さく手を振り企画部のオフィスに入ってしまった。

——謝るといふか、なにか悪いことを企んでいそうな感じがしたんですけど……

「……まあいいか」

今は比留川の婚約宣言を、パートナーとして恥ずかしくない態度で待つことの方が重要なのだから。

桃花と別れ、気持ちを落ち着かせた絵梨がトイレからオフィスに戻ると、沸き立つような拍手の音が聞こえてきた。

さらに、あちこちから「おめでとー」「上手くやったな」という、祝辞の声も聞こえてくる。

何事かと思つてオフィス内を見渡すと、安達部長の隣に比留川の姿を見つけた。彼はしきりに、周囲から「おめでとう」と肩を叩かれたりしている。

——一樹さん、嬉しそう。

いつも強気で自信に満ちた表情を浮かべている彼だが、今日は特に嬉しそうな表情を見せている。オフィスを包む祝福の空気に、比留川のために頑張ってきたことが、結果的に皆の幸せにも繋がっているのだと実感できて絵梨も嬉しくなる。

満ち足りた思いで祝福の光景を眺めていると、一瞬、比留川と目が合った。でも、すぐに彼は絵梨から視線を逸らしてしまう。

「あれ……？」

——てつきり微笑みかけてくれると思つたのに。

それが最初の違和感だった。そしてすぐに、それより大きな違和感を感じる。

何故か、安達部長と比留川の隣に桃花が立っているのだ。

そして、周囲の人たちは、どうやら比留川と桃花に向かつて拍手をしている。

コンペティションの成功を讃えるのであれば、比留川の隣に、桃花が寄り添っているのはおかしい。

「ねえ、なにかあつたの？」

胸騒ぎを覚えた絵梨は、席に戻り隣の郁美に声をかけた。

「ああ、驚かないで聞いてね」

そう断り、郁美が絵梨の耳元に顔を寄せる。

「比留川さんと安達さんが、ついさつき婚約を発表したのよ」

「……え？　——ええええっ!？」

耳に入ってきた情報を、上手く理解出来ない。

思考が追いつかず驚きの声を上げる絵梨を、比留川が一瞥する。だがすぐに、無関心な様子で視線を逸らした。そんな比留川の隣で、桃花が勝ち誇つたように微笑む。

「絵梨ちゃん、ありがとう。そんなに喜んでもらえるなんて嬉しい。皆さんの祝福を裏切らないように、一樹さんと二人で、幸せな家庭を作ります」

桃花の初々しく聞こえる言葉に、周囲から再び拍手が沸き起こる。

「……えっえっえ」

——ちよつと待って、私は？

驚きのあまり、思っていることが声にならない。救いを求めて比留川に視線を向けても、彼はこちらを見てもくれない。まるで他人事のようなのだ。

これはどういふ種類の冗談なのだろうか。というより冗談であつて欲しい。

でも冷めた比留川の横顔を見れば、これは冗談などではないとわかる。彼は絵梨を裏切り、桃花を選んだのだ。

——天国から地獄。

呆然と立ち尽くす絵梨の頭に、その言葉がこだました。

【絵梨ちゃん、おめでどう。

でも天にも昇るなんて、死んじやいそうでちよつと心配になるよ。

サクラ】

比留川と桃花の婚約発表から一週間。

絵梨は、久しぶりに行きつけのカフェ、『二葉』を訪れた。

定位置であるカウンターの右端の席に腰を下ろし、カプチーノを注文する。そして、目の前にあるアンティーク調のテーブルランプの下からピンク色のメモを引っ張り出した。

そのメモには、絵梨宛てのメッセージが書き込まれている。差出人の名前は、サクラ。

絵梨同様、この店の常連だというサクラに、直接会ったことはない。だけど、文通のようなメッセージのやりとりを、もう一年以上続けている。

桜の花びらの形をしたメモに、可愛い文字で綴られた祝福のメッセージを見て、つい重いため息が漏れてしまう。

「暗っ！」

カウンターの中から、低い声が聞こえてきた。

顔を上げると、飲み物を片手に大袈裟なほど口角を下けている幸根和也と目が合った。

このカフェのオーナーである幸根は、客商売をしているだけあって、表情豊かで話が上手い。そんな彼が、絵梨を見て露骨に顔を歪めている。

「すみません」

泣きたい気持ちで堪えてクシャリと笑うと、幸根が絵梨の前にカプチーノを置いた。

「なに？ マリッジブルーってヤツ？」

幸根の言葉に、それならよかったのにと、絵梨は眉を下げる。

「実は……」

「どうした？」

「彼との婚約……っていうか、そもそも付き合っていたこと自体が、なかったことになってしまっ  
て……」

「はあ!? 一体なにがあった？」

絵梨の言葉に、幸根が目丸くする。

それと同時に、すぐ横から「えっ？」と、驚いたような声が聞こえてきた。

その声に驚き、絵梨が視線を向ける。一つ椅子を挟んだ左隣に座るスーツ姿の男性が、驚きの表情で絵梨を見ていた。

「ああ、失礼」

会話に割り込んでしまったことが気まずいのか、男性が口元を手で覆って謝罪する。

「いえ。なんて言うか、こちらこそ」

突然隣でこんな話をされたら、驚くのも無理はない。軽く頭を下げた絵梨は、改めて男性の姿を見る。

座っただけでもわかるほど、背が高い。スッキリした鼻筋に、ほどよく厚みのある唇。非常に整った顔立ちをした男性だ。あまりに整いすぎて冷たく見えそうだけど、わずかに垂れた目尻が人懐っこい印象を与えてくる。年はおそらく幸根と同じ二十代後半から三十代前半くらいだろう。

こちらを見つめる意志の強そうな眼差しに、目を奪われてしまう。ついまじまじ見つめてしまったが、絵梨は彼に見覚えがあった。

会話をしたことはないけれど、彼もこの店の常連らしく、たまに見かけるのだ。自然と聞こえてくる会話から推察するに、幸根の古い知り合いのようだった。

「雅翔、盗み聞きはよくないぞ」

絵梨の予想どおり、気心の知れた仲なのか、幸根が軽い口調で男性を窘める。

「だから、ごめんって……」

「いえ、この場合、驚くような話を急に始めた私の方が悪いです」

咄嗟にフオローする絵梨に、雅翔と呼ばれた男性が頭を下げてきた。絵梨も軽く会釈を返す。そんな二人のやりとりを見て、幸根が意味ありげに口角を上げた。

「絵梨ちゃんさえよかったですら、コイツも話に交せてやってよ」

「えっ……」

—— ほぼ初対面の人にするような話では……

困惑する絵梨に、幸根がもっともらしく言う。

「悩み事なんて、一人で抱え込んでても苦しいだけでしょ。こいつは俺の昔からの知り合いで信用出来るし、何でも屋で経験豊富だから、きつといい相談相手になると思うよ」

「何でも屋って……」

なにか言いたげな雅翔の視線を無視して、幸根は、「それでは紹介から」と、絵梨へ手のひらを向けた。

「ウチの常連、逢坂絵梨ちゃんです」

突然始まった幸根の紹介に合わせて、絵梨は慌てて会釈をする。幸根は次に、絵梨へ向けていた手のひらを雅翔に移動させた。

「で、こっちは俺の友人で、何でも屋の雅翔君です」

—— 何でも屋って、本当にいるんだ。

メディアなどで、そうした存在を耳にしたことはあったけど、実際にそれを生業としてしている人を初めて見た。

「それで、絵梨ちゃんに一体なにがあったワケ？」

幸根から先ほどの続きを促されて、視線を彷徨わせる。

平日の閉店間際。店内には絵梨と彼しか客はいなかった。これなら、他の誰かに話を聞かれる心配はない。



この一週間、自分の身に起こったことを、誰にも打ち明けることが出来ず、一人で悩んで苦しかったのも事実だ。

——幸根さんの言うとおりで、誰かに話を聞いてもらえば、少しは気持ちが軽くなるかな。

正直、この気持ちは、一人で抱えるには重すぎる。

そう自分を納得させて、絵梨は重い口を開いた。

「付き合っていた人……少なくとも私はそう思っていた人に、『今回のコンペティションで、うちの企画が採用されたら結婚しよう』『契約が取れたら、その場で皆に婚約宣言するから』って、言われていたんです」

「うん。それは俺も絵梨ちゃんから聞いている」

会社では二人の関係を秘密にしている分、聞き上手な幸根に、つい名前を伏せて彼とのことを色々ノロけてしまっていた。

「だから……って言うと、語弊があるんですけど、私、これまで彼の仕事を出来る限りサポートしてきたんです。彼が接待で早く帰りたいって言えば、代わりに残業して仕事を片付けたし。休日返上で、コンペティションに向けた情報収集をして資料作ったり、こちらの意図をわかりやすく伝えるためのイラストボードを作ったり、タレントさんや衣装デザイナーさんの日程をさりげなく探って、仮押さえしたり……」

CM制作のコンペティションは、ポーカージャンゲームに似ている。

良い企画を出すのは当然としても、参加者が互いに、手持ちの札を完全に晒すことなく、相手に

より有効なカードを持っていると匂わさなくてはいけない。  
そのためには多少のはったりも必要だ。だが、いざ仕事が決まってみたら中身が全然違っていた、では目も当てられない。  
そうならないように、あらかじめ関係者のスケジュールを仮押さえしておくことと、契約が取れた際に仕事を受けてもらえるかの確認は欠かせないのだ。

しかも、話が流れた時に、相手をガツカリさせないよう配慮しながら進める必要があるので、細心の注意が必要となる。  
「ここ二ヶ月ぐらい、ずっと忙しそうにしてたよね。休日に来て、ずっとパソコンいじったり、電話したりしていたし」

「その甲斐もあってか、コンペティションではうちの会社の企画が採用されたんです」

「へー、おめでどう」

この先に待っているのがバッドエンディングと承知していながら、幸根が拍手する。絵梨は苦笑しつつ、ふうっと、ため息を漏らした。

「で、めでたく大手のCM契約が取れた途端、彼は部長の娘さんとの婚約を発表し、私との約束はなかったことになりました」

「ああ……」

黙って話を聞いていた雅翔が、苦い顔をして息を吐く。その向かいでは、幸根がオーバーリアクションで天を仰いだ。

「あちゃ〜。やられたね。で、その彼は、なんて言ってるワケ？」

「それが……婚約発表の日から、彼にはずっと無視されていて……。目も合わせてもらえない状態だったんです……」

つくづく惨めだ。絵梨は両手で自分の顔を覆って俯いた。

「ああと……、じゃあメールとか電話で連絡取って、仕事とは関係ない場所で会って話し合ってみたら？」

幸根の提案に、絵梨は俯いたまま首を横に振る。

比留川の真意が知りたくて、すでに何度も、話し合いの場を設けるべく連絡を試みた。だけど、まったくと言っていいほど取り付く島がない。

それでもどうにか、比留川が一人になるタイミングを見計らって捕まえたら、「社内ですトーカーングとかって、マジで気持ち悪いんだけど」と、侮蔑の言葉を投げつけられた。

酷い裏切り行為を受けたあげく、何故そんな扱いを受けなきゃいけないのか、さっぱりわからない。

絵梨がどうにかして比留川と連絡を取ろうとしたのは、なんの前触れもなく彼が桃花と婚約発表をしたからだ。自分と結婚しようと言っていた言葉は嘘だったのかと訴える絵梨に、比留川は「その話に、証拠はあるのか？」と嘲笑ったのだ。

付き合っている間のメールやプレゼントは残してある。けれど、比留川曰く「婚約成立後の婚約破棄ならともかく、気まぐれにちよつと付き合っただけの相手には、なんの法的責任もな

い」とのことだった。

それどころか、これ以上執拗につきまとうなら、絵梨をストーカーで訴える、とまで言った。

比留川の言うとおり、恋愛期間中の『結婚予告』など、法的にはなんの責任もないのだろう。

おそらく、接待に必要なだからと話す比留川に貸したお金も、借入書を交わしていないため、泣き寝入りするしかない。

だがどれだけ理路整然と論破されたところで、簡単に割り切れないのが人間の感情だ。

しかも比留川は、悔しさに唇を噛む絵梨に「お前と結婚して、俺になんのメリットがある？」と、笑いながら止めを刺した。

結婚におけるメリットと言えば、好きな人と一緒にいられることではないのか。そう戸惑う絵梨に、比留川は「じゃあ俺には、お前と結婚するメリットはないから」と、断言した。

つまり、比留川にとつての絵梨は、『仕事の役に立つから好き』『文句を言わずに、なんでも言うことを聞かから好き』程度の便利グッズ的な存在で、最初から長い時間を一緒に過ごしたいと思える相手ではなかったということだ。

それに比べて桃花は、見た目が可愛く、部長の娘というメリットがある。実家の資産も、絵梨の実家より遙かに上回っている。

「コンペティションに勝てた今、桃花に比べてたいしたメリットもないお前はもういらなく」。そう、嘲笑う比留川に、それ以上追いつがることは出来なかった。

その時のことを思い出し、絵梨は込み上げる悔しさに下唇を強く噛む。

そんな絵梨を気の毒そうに見つめながら、幸根がため息を吐いた。

「最低な男だな。で、相手の女の子は、絵梨ちゃん存在を知らなかったの？」

「……たぶん、知っていたと思います……」

「……」  
ハッキリ確認してはいないけど、二人の関係を知らなければ、あの日、わざわざ絵梨に「ごめんね」などと言ってこなかったはずだ。

それまで黙って話を聞いていた雅翔が、「なんか、最低なカップルだな」と、低い声で呟いた。声に反応して彼に視線を向けると、雅翔がじつと絵梨を見ていた。

「人の感情を道具のように利用するような奴のために、君が傷付く必要はない」

同情ではなくいたわりに溢れた雅翔の眼差しに、絵梨は再び下唇を噛んだ。

「……」

「どうかした？」

泣いてしまわないように目尻を押さえる絵梨の顔を、雅翔が心配そうに覗き込む。その声の優しさにも、また涙が出そうになった。

「ご、ごめんなさい。……なんだか、自分がバカだから、こんなことになったのかな……とかずっと思ってたから」

比留川が悪いと思う反面、本当は都合よく利用された自分がバカだったのだという自責の念もあって、ずっと苦しかった。

職場では誰にも相談出来ず、その苦しみと答えをくれる人もいなかった。なので、こうやって、

第三者に『悪いのは比留川だ』と、断言してもらえただけで心が救われる。

言葉を詰まらせる絵梨の肩を、雅翔がポンツと優しく叩く。

「君は、悪くないよ。もし君が悪いって言うなら、それは自分の利益のために恋人を利用して、最低な形で思いを踏みにじる、その男のやり方を正しいと認めることになる。俺はそんなことを許す人間にはなりたくない」

「……ありがとうございます」

真摯な気持ちで伝わってくる雅翔の言葉に、絵梨は頭を下げた。そして、顔を上げ、心配そうに見つめる二人に微笑んでみせる。

「あんな人が運命の相手じゃなくてよかったっ！ そう思うことにします」

自分に言い聞かせるように宣言する絵梨に、雅翔が目細めた。

「ポジティブだね」

「祖母の受け売りですけど。『人生、幸せも不幸も同じ数ある。幸せな人生を送れるかどうかは、その人が幸せを見つけるのが上手いか、不幸を見つけるのが上手いかの違いだけだ』って」

「いいことを言うお祖母さんだね」

褒める雅翔に、絵梨は「はい。自慢の祖母です」と、胸を張る。

「そうそう、そんな悪い男のことなんて、さっさと忘れるのが一番だよ」

「そう、ですね」

カウンターの向こうから励ましてくれる幸根に、絵梨はぎこちない笑みで頷いた。

今さら比留川との関係を修復したいとは思わない。だったら、幸根の言うように、もう過ぎたことだと割り切って、忘れてしまおうのが一番なのだろう。

でも、頭ではそうわかっていても、つい、比留川と桃花の関係はいつから始まっていたのか、と考えてしまう。

部長公認で婚約発表をしたのだから、それなりの時間を費やしていたことは間違いない。

比留川のために、休日を削って働く絵梨のことを、比留川と桃花は、どう思っていて見ていたのだろうか。

比留川が仕事の付き合いで早く帰る時、彼の代わりに残業を引き受けていたけれど、本当は仕事ではなく桃花とデートをしていたのではないか。

絵梨が貸したお金は、桃花のために使われたのではないだろうか。

そんなことを考え出すとキリがない。

自分は、ずっと二人に陰で笑われていたのかもしれない。そう思うと、どうしようもなく惨めで、居たたまれなくなる。

——でも今の仕事が好きだから、会社は辞めたくない。

だとすれば、どんなに辛くても、忘れたふりをして暮らしていくしかないのだ。

下唇を噛み、自分にそう言い聞かせていると、絵梨の肘に雅翔の手が触れた。

「……っ！」

驚いて隣に視線を向ける。そこには、真剣な表情をした雅翔がいた。突然腕を掴まれたことより、

自分を見つめる彼の表情に戸惑う。

「君は、それでいいの？」

「え？」

目を瞬かせる絵梨に、雅翔が優しく確認する。

「悪い男に引つかかった。勉強になった。……素直にそう割り切れる？ 後で苦しくなったりしない？」

その気持ちを、言葉にしてどうする？

ここで悔しさを認めたところで、なんの救いにもならない。

そう思うのに、さっき絵梨の気持ちに共感してくれた雅翔に「正直に答えて」と言われてしまうと、自分の気持ちに嘘がつけなくなる。

「……きつと、すごく苦しくなると思います」

雅翔の真剣な眼差しに押され、思わず本音が零れてしまう。

絵梨の言葉を聞いた雅翔は、形のよい眉を寄せて表情を曇らせた。

——そんな顔をされても困る。

どんなに苦しく割りきれなくなつて、絵梨にはこれ以上どうすることも出来ないのだから。

「君はなにも悪くない。だからそんな顔をするんじゃない」

絵梨の目を真っ直ぐ見ながら雅翔が言う。

「でも……」

じゃあ、一体どうすればいいというのだろうか。

言葉を探して黙り込んでみると、雅翔がなにかを思いついたように眉を動かす。

「そうだ。その男に復讐してやるのはどうだろうか？」

「ああ、いいねそれっ！」

カウンターの向こうから、一際明るい幸根の声が聞こえてきた。

「え？」

復讐という禍々しい響きに、絵梨は本能的に拒否感が働く。

表情を強張らせる絵梨とは反対に、雅翔は、爽やかな表情で笑った。

「そう。復讐するは我にありつてね」

「それ、本来は違う意味じゃなかったっけ？」

幸根の突っ込みに、雅翔は「あれ？ そうなの？」などと軽いノリで返している。

「ちよっ、あの……」

焦る絵梨に笑みを向け、雅翔は自分の唇を人差し指でトントンと叩く。

「とにかく、君はなにも悪くないのに、そんな風に下唇を噛みしめて我慢する必要はないよ」

「……っ！」

辛いことがあると、無意識に唇を噛んでしまうのは、絵梨の子供の頃からの癖だ。自分の感情を押し殺したり、言いたいことを我慢して吞み込んだりする時、唇を噛んでしまう。

絵梨は雅翔から顔を逸らし、そっと自分の唇に指で触れた。

噛みしめ過ぎた下唇がひび割れてしまっている。触った時に痛みを感じるのは、噛んだところが傷になっているからかもしれない。きつと、雅翔はそれを見て気になったのだろう。

「……癖なんです。すみません……」

「謝らなくていい。でも自分が悪くないなら、そんな風に下唇を噛んで、本音を閉じ込める必要はないんだよ」

雅翔は、諭すような優しい口調で絵梨に声をかける。

「……」

「ここはやっぱり、復讐でしょう」

幸根の言葉に、絵梨は俯く。

そんなことをしても、きつと後で惨めな気持ちになる。それに、職場での絵梨の立場も悪くなってしまうに違いない。

「そんな後ろ向きなことしたくないです。きつと、後で虚しくなります」

やけにはしゃいでいる幸根に釘を刺す。でも幸根は、反省するどころか、嬉々とした表情を見せた。

「その言い方だと、前向きな復讐ならありなんですよ？」

「前向きな復讐……？」

それはどんな復讐だ。

眉を寄せる絵梨に、幸根はカウンターから身を乗り出すようにして「ね、それならいいで

「まあ、もしそんなものがあれば……」

幸根の勢いに押されて絵梨が頷くと、彼が「わかった」と、笑う。

「じゃあ、そのムカつく男に、前向きな復讐をしようよ。絵梨ちゃんにその気があるなら、そこにいる何でも屋の雅翔君が、復讐に協力してくれるって」

幸根がそう言っただけで雅翔を指さす。

驚いて雅翔に視線を向けると、雅翔も幸根の発言を肯定するみたいに頷く。

「ええっと……」

絵梨の戸惑いを楽しむように、幸根はこれぞ名案といった様子で話を続けた。

「だって、自分のために女を利用して、必要なくなったら捨てるなんて……同性の俺から見ただって、最低な男だぞ。もし絵梨ちゃんがここで泣き寝入りしたら、その男はビッグビジネスのチャンスと上司の娘婿という立場を手に入れて、めでたしめでたし。そんな理不尽な話、俺は納得できないね。……それにさ、もしかしたらだけど、絵梨ちゃんが泣き寝入りするのも、その男の計算のウチだったのかもしれない」

「……ああ」

それはあり得る話だ。

絵梨の性格を知っている比留川なら、絵梨がこういう時、周囲への影響を気にかけて自分の気持ちを呑み込むと予想出来るはずだ。

それを計算に入れての裏切りなら、それこそ、このまま泣き寝入りするのは悔しい。

そう思う絵梨の隣で、雅翔も表情を険しくしている。

「そんな奴のために、君が泣き寝入りする必要はないよ。こんな終わり方は正しくない」

雅翔は強い口調で言い放つ。その様子から、彼は自分の行動に、強い信念を持っている人なのだろうと察せられた。彼の迷いのない姿勢が羨ましい。

そんなことを思っていると、幸根が笑顔で声を上げた。

「な、雅翔もそう思うだろう？ でも、絵梨ちゃん一人で復讐するのは難しいと思うから、何でも屋の雅翔君が協力してやって」

「いや、協力はするけど、さつきから何でも屋って……」

なにか言いたげに、顔をしかめる雅翔を見て、幸根が愉快そうに笑う。

「絵梨ちゃんの心の傷を癒やすついでに、お前の売り込みしてやってるんだろ」

——ああ、なるほど。

絵梨は内心で頷いた。

幸根が復讐に乗り気なのは、友人である雅翔の仕事の営業を手伝う意図があったのだろう。

「ねっ、雅翔に手伝ってもらって復讐したらいいよ。そうすれば、絵梨ちゃんは今のモヤモヤした気持ち解消できるし、雅翔は仕事になる。俺もそんなムカつく男に天罰が下ればスッキリする。……ここにいる三人全員が幸せになれるんだから、これ以上の名案はないと思わない？」

幸根がそう言っただけで得意げな顔をする。

「でも、復讐って、やっぱりいいイメージがありませんし、なんか法に触れそうで怖いっていうか……」

「もちろん俺も、そんな復讐をする気はないよ」

雅翔が、絵梨の意見に賛同する。

「別に、違法なことだけが復讐じゃないだろ。……なんかないか？ 楽しくて、絵梨ちゃんのテンションの上がる復讐の方法」

そう言っただけで幸根は、お前が考えるよ、と雅翔をせっつく。

その求めに応じて、雅翔が顎に手を当てて考え込んだ。

「そうだな……」

しばらく悩んでいた雅翔は、不意に悪戯な笑みを浮かべて絵梨と幸根の顔を交互に見つめた。そして、一つの提案をしてくる。

「どうせやるなら、豪華で楽しい復讐っていうのはどうだろうか？」

「豪華で楽しい復讐……？」

はたして、そんなものがあるのだろうか。

想像がでせず、パチパチと瞬きををする絵梨に、雅翔が楽しげに言葉を付け足した。

「そう。しかも徹底的に」

「それいいねっ！」

幸根が嬉しそうに声を上げる。

「豪華で楽しい復讐。……しかも徹底的に……」

嬉々としている幸根には申し訳ないが、絵梨には、それがどんなものなのかちっとも想像が出来ない。

「どう？ そんな復讐なら、悪くないんじゃない？」

「えっと……。よくわからないけど、それでも復讐をするっていうのは……ちよっと」

なかなか踏み切れない絵梨に、雅翔が言う。

「今すぐ決断しなくていいから、少しだけ、お試し期間を作ってみない？」

「お試し期間……ですか？」

「そう。まずは少し、俺の提案する復讐を試してみてよ。それでもし、その内容に君が納得出来たら、その時は正式に俺に仕事の依頼をする。それでどう？」

「そう言われても……。それに、私には何でも屋さんを雇う余裕はないし」

「お試し期間の間のお金はいいよ。もし君が正式に復讐を依頼する気になったら、その時に改めて金額の話しよう」

「え、でも……」

何故そこまで積極的に復讐をしたがるのだろうか。困惑しつつ、絵梨は、雅翔と幸根を見比べた。目が合うと、雅翔がとても真摯な視線を向けてくる。

復讐という言葉は重いけど、本気で絵梨のことを思っただけで提案してくれているのがわかるだけに、これ以上無下にするのも申し訳ない。

——とりあえず、お試だけでもお願いしてみようかな……

それでどうしても気が乗らなければ、その時は断ろう。そう覚悟を決めて、絵梨は頷く。

「じゃあ……とりあえず、お試し期間ということだ」

「ありがとう」

雅翔が、ホッと安心したように笑う。

「よし。ひとまずは交渉成立ってことで、よろしく」

そう言っただけで差し出された雅翔の手に、絵梨はおずおずと手を重ねた。

「復讐は、豪華に楽しく徹底的に」

そのスローガンを楽しそうに口にする雅翔に、カウンターの向こうで幸根も満足そうに頷いている。

「じゃあ逢坂さん、よろしく」

そう挨拶する雅翔に、幸根が「絵梨ちゃんでもいいだろ」と、突っ込みを入れる。そして絵梨に向けて視線で同意を求める。

「絵梨でいいですよ。幸根さんも、名前で呼んでるし」

絵梨がそう言うと、雅翔がどこか嬉しそうな表情を見せた。

その表情がくすぐったくて絵梨が視線を落とすと、少し恥ずかしそうに絵梨の名前を呼ぶ雅翔の吐息が髪に触れた。

「じゃあ、絵梨ちゃん、よろしくね」

絵梨は微かに揺れた髪を掻き上げ、視線を雅翔に戻して頷く。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

そんな二人のやりとりを見て、幸根がパンッと、手を鳴らした。

「じゃあ、交渉成立の乾杯といきますか」

幸根の宣言に、雅翔がおもむろに自分のカップを手に取り小さく揺らす。

二人に促されて、絵梨も自分のカップを手に取った。

「乾杯！」

そう言っただけでカップに口を付けると、カプチーノはいつのまにかすっかり冷めていた。

——なんだか、変なことになっちゃったな……

思いもしなかった成り行きだけど、誰にも言えずにいた思いを打ち明けたことで、絵梨が悪いわけじゃないと言ってくれる人たちと出会えた。

そして彼らは、味方になってくれた。

冷めたカプチーノは、絵梨の心に温かくしみ込んでいった。



「俺はいつから何でも屋になったんだ？」

絵梨と交渉成立の乾杯をしてから一時間後。扉に『CLOSE』の札を下げ明日の仕込みを始め



た幸根に、雅翔が不満げな声を投げかける。

「今まで、散々俺の悪ふざけに乗っついて、それはないんじゃない？」

幸根が、悪びれた様子もなく笑う。

「確かに乗ったけど、だからって『何でも屋』って……彼女完全に誤解したぞ」

明日も朝が早いという絵梨とは、連絡先を交換した後、またこの店で落ち合う約束をして別れた。「なんだよ。一緒に仕事してた頃、お前よく後輩に言っただじゃないか。俺たち総合商社は、平たく言えば何でも屋だ……って」

「そりゃ、言っただけど」

だがそれには、『だから一つの分野だけにこだわらず、色々な情報に興味を持って、常にアンテナを張り巡らせておけよ』と続く。決して、絵梨が考えているであろう職業ではない。

拡大解釈もいところだと、雅翔は幸根を睨む。

「なんだよ、その目は。……じゃあ、ありのままのお前を紹介して欲しかったのか？ 殿春総合商社、次期社長の桜庭雅翔君です、って」

雅翔が嫌がるのを承知で、幸根が聞いてくる。

案の情、雅翔は露骨に顔をしかめた。

「それはまずいだらう。……今度ウチと、彼女の会社が一緒に仕事をするみたいだし、変に気を遣われそうだ」

部署が違うので、雅翔はCM制作に関与していないが、絵梨の勤める会社が殿春総合商社の新C

Mを手がけるといことは知っている。

その件を抜きにしても、殿春総合商社の次期社長という肩書きはなにかと面倒なので、なるべくなら彼女に知られたくないというのが本音だった。

「な、俺の判断は正しかっただろ。ついでにお前の売り込みもしてやったんだから、感謝しろよ」

雅翔に向かって、幸根がニンマリ勝ち誇った笑みを浮かべた。

昔話に出てくる賢いキツネを思わせるその表情を見ると、素直に感謝するのが、どうにも癪に障る。

雅翔はぐっと眉を寄せて、視線を逸らした。

「しかし、お前と絵梨ちゃんって、不思議な縁があるよな」

頬杖をついて不機嫌な表情を浮かべる雅翔に、幸根がしみじみと呟く。

「まあ……確かに」

その点については、素直に認める。

絵梨と直接言葉を交わしたのは今日が初めてだ。だが実のところ、雅翔と彼女との関わりは長い。——始まりは、……やっぱりコイツの悪ふざけだったな。

そんなことを考えていると、カウンターの向こう側にいる幸根に話しかけられた。

「で、彼女の復讐に、ちゃんと協力してやるんだろ？」

鶏肉を切り分け、自家製のタレに漬け込んだ幸根が、手を洗いながら雅翔に確認してくる。

「もちろん。そんな最低な奴のために、彼女が泣き寝入りするなんて許せないから」

「豪華に楽しく、徹底的に復讐する？」

さつき打ち上げたスローガンを幸根が再び唱える。

「そう。……俺に出来ることなら、なんでもしてあげるから、少しでも彼女に元氣を取り戻して欲しい」

なにも悪くない絵梨が、苦しそうに唇を噛みしめる姿を見たくない。

そのとっかかりとして、『復讐』という言葉を選んだだけだ。

「それで、どうやって復讐する気だ？ その最低男を、殿春の力で左遷にでもするか？」

「まさか。そこまでの公私混同はしないよ」

確かに、殿春の力を使えば、あつけないほど簡単にその男を潰すことが出来る。だがそんなやり方では、きつと彼女は喜ばないだろう。

「ふーん。あれだけプライベートを犠牲にして殿春に貢献しているんだから、一度くらい権力を振りかざしたっていいだろうに」

「遠慮しとくよ」

幸根の言葉を、穏やかな笑みで却下する。

「残念」

そう笑う幸根は、冷蔵庫の中からビールを二本取り出す。そしてカウンターの中から出て、一本を雅翔に手渡しながら隣の席に腰を下ろした。

幸根はビール片手に、テーブルランプの下から桜の花びらの形をした紙を引つ張り出す。

その紙には、さつき雅翔が電話のために席を外した際に、絵梨が急いで書いた文字が綴られていた。

照明を落としたカウンター席で、幸根はテーブルランプの光にメモをかざす。

「えっと……『サクラちゃん。プロポーズの話、中止です。ちよつと大変だけど、元氣です』、だつて」

幸根が絵梨のメッセージを読み上げ、雅翔の顔を窺ってくる。

「そうだな。じゃあ『きつとそのうち、いいことがあるから大丈夫だよ』、かな」

「了解」

幸根はそう答えると、ポケットから桜の花びらの形をした和紙を取り出した。そしてそこに、持っていたペンで、雅翔が口にしたメッセージを書き込んでいく。

普段の幸根の字を知っている雅翔には、彼があえて綴る極端に丸みを帯びた字に、つい苦笑いを零してしまう。

——今さら、本当のことは言えないよな。

文字を綴る幸根を見守る雅翔は、気まずさから首筋を掻く。

絵梨とメッセージのやりとりをしているサクラの正体は、実は幸根と雅翔だ。

幸根の悪ふざけをきつかけに、雅翔の言葉を幸根が書き記す形で、絵梨との顔の見えない言葉のやりとりをもう一年以上続けている。

「……」

——こんなこと、いつまで続けるんだろう……

いつもそう思うのだけど、自分からやめようとは言い出せないでいた。

そんな雅翔に視線を向けて、幸根がニンマリと微笑む。

「ついでに『素敵な王子様が、復讐の手伝いをしてくれると思います。その人が絵梨ちゃんの運命の人じゃないかな?』とか、書いというてやろうか?」

「バカかっ」

悪乗りする幸根の脛すねを蹴ってやった。

「痛っ!」

幸根は慌てて足を引つ込めつつ、怒ることもせず口を開く。

「せっかくだ、楽しめよ。で、ついでに頑張つて、絵梨ちゃんの運命の人にのし上がれ」

「運命って……」

頑張つての上がらなきやいけな階段で、それはもう運命じゃないだろう。

そう思っているはずなのに、絵梨との縁をくすぐったく感じているのも事実だ。

殿春総合商社の未来の担にい手である雅翔は、多忙な日々を過ごしている。

こんな多忙な自分が恋人を作つても、相手を幸せに出来るわけがない。それに恋愛を成就させるためには、相手の気持ちも必要になる。

だから恋人なんて大それたことは望まないけど、もっと絵梨との繋つながりが増えればいいと、願つてしまふ自分がいる。

そんなことを思いながら隣に視線を向けると、またずる賢いキツネの顔をした幸根と目が合った。

「世の中、そんなに都合良く出来てないよ」

内心とは裏腹にそう返して、雅翔は手にしたビールを呷あおった。

## 2 楽しい復讐の始め方

翌日の昼休み。

近くのコンビニでお弁当を買うべく、一緒にオフィスを出た友人の郁美が、不意に呟いた。

「よかった」

「え? なにが?」

驚いて視線を上げると、長身で細身の彼女と目が合った。

性格がサバサバしている郁美は、スレンダーな体形にベリーショートの髪がよく似合う。化粧もすつきりしたナチュラルメイクで、どこか中性的な感じの女性だ。学生時代は女子生徒から「王子様」と呼ばれ、慕われていたという話にも納得がいく。

「なんか最近、元気なさそうだったから」

「……そうかな」

比留川とのことを秘密にしていたので、郁美にも、今抱えている悩みを打ち明けることは出来な

かった。そんな自分を、郁美は気にかけていてくれたのか……

「元気になったみたいでよかったよ」

「うん、ありがとう……」

なにも聞かずに、それでも静かに気にかけてくれていたことが嬉しい。

一人で苦しみを抱えていただけに、今はそうした誰かの存在に救われる。

——そういえば……

昨日知り合った何でも屋の雅翔も、絵梨を心配して復讐を提案してくれたが……

——あれは本気なのか……

豪華に楽しく徹底的な復讐。そんな復讐があるならちよつと面白そうだけど、どんな復讐なのか想像もつかない。

もしかしたら冗談半分の提案だったのかもしれないけど、二人があまりに乗り気だったので、つい依頼してしまった。

——まあ、本気だったとしても、イヤなら断ればいいし。

とにかく、自分のことを気にしてくれる誰かがいるということは、それだけで傷付いた心を癒やしてくれる。

「あ、絵梨ちゃん！」

そろそろエレベーターホールというところで、背後から甘えた声が聞こえた。一瞬で心が警戒態勢に入る。

心の傷が疼くのを堪えて振り向くと、案の定、桃花が立っていた。

「安達さん」

「やだ、名前で呼んでいいって言ってるのに」

桃花がそう言って艶やかに微笑み、こちらへ駆け寄ってくる。

「あのね、絵梨ちゃん。本当にごめんね」

なんとか平静を装う絵梨の前に立ち、桃花は可愛らしく両手を合わせた。

「え？」

咄嗟に比留川とのことだろうかと思う絵梨に、桃花が言葉を続ける。

「昨日、絵梨ちゃんが自殺する夢を見ちゃったの」

「……はっ？」

予想外の発言に驚く絵梨に構うことなく、桃花が「本当にごめんね」と眉を下げた。

「なんでそんな夢を見たのか、私にも全然わからないんだけど……絵梨ちゃんがね、『不幸過ぎて生きているのが嫌になった』って、自殺する夢を見ちゃったの」

「はあ……」

だからといって、何故それを自分に報告してくるのだ。

あまりのことに、表情を取り繕うのも忘れて桃花を見ると、彼女がその理由を説明してきた。「私、嘘とか苦手だから、ちゃんと謝っておきたかったの。だって、そんな酷い夢を見たのに、それを黙っているなんて、すごく悪いことしているみたいない気がして……」

「本当にごめんなさい」と、桃花が、一見すると悲しげに見える顔で見つめてくる。その姿は、なんの悪意もないと錯覚しそうになるほど、愛らしさに溢れている。

——あなたがなにも言わなければ、私は嫌な思いをしなくて済んだんですけど……でも、それを言葉にすれば絵梨の負けになる。

絵梨が感情のままに言葉を口にすれば、桃花はここぞとばかりに被害者面をして騒ぎたてるに違いない。

男性社員にウケがよく、部長の愛娘でもある桃花に謝られたら、こっちは『許す』という選択が難しいのだ。

「……いいよ別に。逆に気を遣わせてごめんね」  
白々しい口調になったのは仕方がないと思う。

「よかった。絵梨ちゃん優しいから、きつと謝ればなんでも許してくれると思ってたんだ」  
なんでもを、わざと強調してくるところに仄暗い悪意が滲んで見える。

「……」  
きつく唇を噛みしめて、ざらつく気持ちを必死に抑え込む。桃花は、そんな絵梨の表情を嬉しうに見つめていた。

その時、郁美が見かねたように口を挟む。

「ねえ、話は終わり？」

財布を振って食事を買に行きたいのだと意思表示をした。

「あつ！ ごめんなさい」

今、郁美の存在に気が付いた、そう言いたげに大袈裟なくらい肩を跳ねさせて、桃花が上辺だけの謝罪をする。

「じゃあ、行こう」

郁美がさっさと絵梨を促してエレベーターホールへ歩きだす。

絵梨がその後に続こうとした時、桃花が絵梨の手を掴んだ。

「あのね。許してくれたお礼に、いいこと教えてあげる。……あんまり安っぽい物を使ったらダメだよ。絵梨ちゃん自身が、男の人から安い女として扱われちゃうからね」

「……」

一瞬、なにを言われたのかわからずキョトンとする。

そんな絵梨に見えるように、桃花は手にしている財布を揺らす。それはブランドにあまり興味のない絵梨でも知っている、フランス発祥の有名ブランド品だった。

絵梨が手にしている財布とは、おそらく一桁は価格の違う品。

「普段使いの持ち物は、女性自身の価値を決めるパロメーターなんだから、もっと自分にお金を使わなきゃダメだよ。ただでさえ、絵梨ちゃんはマイナスからのスタートなんだから」

「——っ！」

——それはどういう意味だ。

絵梨が安物しか持っていないから、安い女として比留川にいいように利用されて、捨てられたと

でも言いたいのか。

表情をなくし、自然と財布を握る指に力が入る。

下唇を噛んでぐつと言葉を呑み込む絵梨に、勝ち誇った笑みを残して桃花は去っていった。

——最低。

桃花の人間性も、その桃花に女性として負けた自分も。

このまま桃花に、一方的に感情をえぐられ続けたら、さすがに自分を保つ自信がない。これがこの先も続くのかと思うと、仕事を続けるのが辛くなるのは目に見えている。

何故自分がここまでの仕打ちを受けなきゃいけないのだろう。絵梨は現状への憤りを覚える。

復讐するは我にあり——グツと唇を噛みしめる絵梨の脳裏に、そう口にした雅翔の表情がふと蘇る。

彼のように、自信を持って自分の意見を言えるようになりたい。

「なに、あれ……」

怒りを呑み込みつつもそう呟いた絵梨に、郁美が冷めた声で言ってくる。

「目障りだから早く消えるって、言ってるようなものじゃない？」

「……？」

顔を上げた絵梨に、郁美は肩を竦める。

「比留川が自分のものになって、悔しがる絵梨の顔もじゅうぶん堪能した今、貴女は邪魔だから消えてって、言いに来たんじゃない？」

「えっ！」

郁美に比留川のことを話したことはない。

驚き、表情を強張らせる絵梨の肩を、郁美がぼんと軽く叩く。

「今日は私が奢るから、どこかのお店でゆっくり食べよう」

そう言っつて、郁美がさっさと歩き出す。

「えっと……ごめん」

先にエレベーターに乗り込んだ郁美が、絵梨を待つてボタンを押す。そして、申し訳なきように肩を落とす絵梨に視線を向けた。

「なにが？ 比留川のことを黙ってたこと？」

コクリと頷く絵梨を郁美が笑う。

「なんでも報告するのが友達ってわけじゃないでしょ。それに私が気付いたのも、比留川の婚約発表の時、絵梨の驚く顔を見てだし。……それまでは、単に比留川のこと好きなのかな？ くらいにしか思っつてなかったから」

そこまで気付いていて、なにも言わずに見守ってくれていたんだ。

学生時代、女子に王子様と慕われていたのは、外見だけでなく内面も踏まえてのことだったのだから、納得がいく。

「私……郁美が男だったら、惚れてるかも」

「なにバカなこと言ってるの。……まあ、話してくれていたら、こんなことになる前に止めたの

「つて後悔は残るけど」

郁美が、財布の角で自分の眉間を叩く。

「え？」

「まあ、その辺のことも含めて話してあげるよ。ほら、早く行こつ」

ちょうどエレベーターが一階に着き扉が開いたところで、郁美が絵梨を促す。

——郁美の言葉、なんとも言えない含みを感じるな。

嫌な予感を覚えた絵梨は、財布を握り直して郁美の背中を追いかけた。



仕事帰り、絵梨が一葉に顔を出すと、まだ雅翔の姿はなかった。

「よかった……」

昼休み、郁美と食事をしてる時に、雅翔から昨日の話の続きをしたいから今日の帰りに会えないかとメールをもらった。そこで仕事帰りに一葉で待ち合わせの約束をしたのだ。

明確な時間は決めなかったけれど、待たせるより、待つ方が気楽でいい。

先に到着したことに安堵しつつ、いつものカウンター席に腰を下ろし飲み物を注文した。

そして幸根が自分に背を向けている間に、テーブルランプの下を確認し、メッセージを引っ張り出す。

それは、昨日絵梨が忍ばせたメモではなく、サクラからのメモに代わっていた。

『きつとそのうち、いいことがあるから大丈夫だよ。サクラ』

見慣れた文字に、ホッと息が漏れる。

「ありがとう」

メモに向かつてお礼を言い、それをポケットに忍ばせたところで、店の扉が開く気配がした。

振り向くと、スーツ姿の雅翔と目が合った。

「お待ちせ」

雅翔は羽織っていた薄手のアウターを椅子の背もたれに掛け、絵梨の隣の席に腰を下ろす。

その瞬間、ふわりと甘さを含んだ爽やかな香りが漂ってきた。

メーカーまではわからないけど、よくある男性用オーデオロンとは違う、深みのある複雑な香りだ。彼の香りに何故かドキリとし、絵梨は焦って言葉を返した。

「いえ、私も今きたところです」

「よかった」

そう言って微笑む雅翔の目尻に、小さな皺が出来る。

——なんだか可愛い。

正確な年齢はわからないけど、絵梨より年上なのは確かだ。整いすぎて、まったく隙のない彼の雰囲気、笑った瞬間に少しだけ幼くなる。そのことに気付くと、意味もなくすぐつたい気持ちになった。

——我ながら、単純だなあ。

昼間も、桃花の言葉にすごく傷付いた直後に、郁美の優しさに救われた。今だって、サクラのメモに心がほぐされた。

我ながら単純な性格をしているなと思うけれど、それは別に、悪いことじゃないだろう。辛いことばかり目がいってては、心が疲れてしまう。

それに自分の不幸に忙しいと、せっかく自分に向けられた優しさを見落としてしまう。

単純でよかったと、自分の性格を自画自賛している絵梨に、飲み物を注文した雅翔が話しかける。

「会社はどうだった？」

「友達がいるって、いいなって思いました」

「そう。よかったね」

雅翔の声が優しく、耳に心地いい。

「……」

「で、昨日の話の続きなんだけど、復讐するにしても、まずは、絵梨ちゃんの話をもう少し聞かせて欲しいと思って。……不愉快かもしれないけど、その二人の会社でのことか、教えて欲しいんだ……」

雅翔が神妙な表情で視線を向けてくる。

そう言われてすぐに、今日の桃花とのやりとりが頭をよぎる。

本当は復讐を断ろうかと悩んでいたけど、さすがに今日のような理不尽な悪意を向けられるのは

許せない。もし今後もこうしたことが続くようなら、自分もなにか対策を取るべきなのかもしれないと思った。

そうでないかと、心が疲弊ひへいしていく。

「あの……」

これまでの悔しい思いをどう説明すればいいのかと悩んでいると、喉に言葉がつかえてしまう。

そのもどかしさに、無意識に唇を噛む。そんな絵梨の唇に、雅翔の右手が伸ばされた。

雅翔は右手で絵梨の頬に触れ、指で唇を押さえてきた。

「——っ！」

雅翔の指が触れた瞬間、ひび割れた唇にピリリとした痛みが走る。でもそれ以上に、唇に触れる彼の指に、自分の頬が熱くなったことが気になった。

「唇を噛んじゃ駄目だよ」

「……」

緊張で息も出来ずにいる絵梨を、雅翔は「駄目だよ」と、再びたしな窘めて指を離した。

「すみません」

しゅんとする絵梨に、雅翔が気遣わしげな表情を向ける。

「なにか辛いことがあったなら、ちゃんと言葉で話して」

離れてもなお、唇に残っている雅翔の指の感触に、気恥かたじけずかしさを覚える。

その感触を持て余すように自分の唇を指で押さえた。



「すみません、気持ちを言葉にするのが苦手で……」

そう言い訳しつつ、絵梨は、昼の出来事を雅翔と幸根に話した。

財布の件もなかなかの出来事だったが、ランチを取りつつ郁美に教えてもらった話ほもつとショッキングだった。彼女によると、比留川は今の部署に異動してくる前から、恋愛関係を餌に、都合よく女性を利用する常習犯だったらしい。

他部署から異動してきた比留川が絵梨に目を付けたのは、たぶん企画部の安達部長が絵梨を買っていたからだと言われた。部長に評価されている絵梨を口説き、自分の出世のために利用したのだからと。

そして、桃花もまた学生時代から人の恋人を寝取る常習犯だったらしい。

そんな桃花が、絵梨の恋人である比留川に目を付けたのは、郁美曰く、安達部長が絵梨の仕事を褒め、桃花に見習うように説教したことがきっかけだろう。

『いい子過ぎて損してるわね』

郁美に気の毒そうに苦笑された。けど、絵梨自身は、特にいい子でいた覚えはない。

「絵梨ちゃんの友達は、どうして部長の娘さんの学生時代のことまで知ってるの？ 学生時代から知り合い？」

二人の飲み物を淹れ、雅翔と一緒に絵梨の話聞いていた幸根が素朴な疑問を口にした。絵梨は、それに素早く答える。

「自分でSNSに色々書き込んでるんです」

昼休みに、郁美に見せられたSNSは、本名は隠してあるが、一読して桃花のものとわかる内容だった。

自分が可愛いから、相手の女の子に魅力が足りないから。そんなつもりはなかったのに、友人の恋人が自分に心移りしてしまう……

そうした言葉が並ぶ桃花のSNSには、絵梨と比留川のことも、随分桃花に都合よく脚色して書き込まれていた。

その書き込みによると、絵梨はとくに愛情の冷めている比留川の同情を引いて、なんとか彼を繋ぎ止めようと足掻いている可哀想な女らしい。

「二人とも最低だな」

雅翔の呟きに、仕事をしつつ話を聞いていた幸根も頷く。そして、絵梨に同情的な視線を向けて言った。

「その部長の娘さんって、なかなかいい性格みたいだね」

これまでの桃花の言動を思い出し、絵梨が唸る。

郁美の言葉を借りるならば、『恵まれた環境に生まれた桃花は、自分を特別な存在だと信じて疑わない』のだそうだ。

特別な存在の桃花は、愛されて大事にされることが当然だし、人を傷付けても構わない。そんな思い上がり、今の桃花の性格を形成しているのだと、郁美は言っていた。

なかなか手厳しい意見だけど、絵梨の知る桃花の言動からも、そういったことを感じられる面が

多々ある。

都内で親と暮らし、お金に不自由したことがない。家事の全てを母親に任せ、お給料を全部お小遣いしている桃花には、自分の外見を磨くお金も時間もじゅうぶんにあるのだろう。

それ自体は別にどうでもいいのだが、彼女はこれまで、絵梨に向かって「自分のこと自分ではないきやいなんで可哀想」「地方出身って、お洒落にお金使えなくて可哀想」など、同情の体を装って、あからさまに見下した発言をしてきていた。はつきり言って不愉快だ。

「負け惜しみかもしれないですけど、ちゃんと仕事をし、誰にも迷惑をかけずに生活していることは、可哀想じゃないです」

それだけは譲れないと、語気を強める絵梨に雅翔が頷く。

「そうだね」

「ちゃんと自立してる絵梨ちゃんに向かって可哀想って……、その子ども感覚してるんだよ」

苦い顔をする幸根に、絵梨は困ったように笑う。

「それはきつと、私の家庭の事情に対する嫌味も込められているんだと思います」

「どういう意味？」

「私、両親がいないんです。たぶん、それを彼から聞いて、私のことを『可哀想』って言ってるんだと思います」

隠しているわけではないが、公言しているわけでもない。

両親が早くに離婚して、母方の祖父母に育てられた——そんな断片的な情報で、『可哀想な子』

と、決めつけられるのが嫌だったからだ。

「小さい頃に両親が離婚して、どちらも私を育てられない事情があったので、母方の祖父母に育てられました。だけど、大学まで卒業させてもらったし、そのおかげで好きな仕事に就けました。だから自分ではラッキーな方だと思ってます」

正直に言えば、多少の強がりもある。

それでも祖母が言うとおり、人生に幸せも不幸も同じ数だけあるのなら、不幸に溺れることなく、少しでも多くの幸せを見つけれられる人でありたい。

だからこそ、離婚後、それぞれ早々に新しい家庭を築いた両親のことも許すことができた。絵梨を重荷に感じながら無理して育てられるくらいなら、好きに生きてもらえてよかったと思うことにしている。

「そういう考え方が出来るだけでも、絵梨ちゃんは間違いなく幸せな人だよ」

雅翔の言葉には、少しの同情も感じられない。

上辺のわかりやすい情報だけで絵梨を判断することなく、絵梨の考え方を踏まえて肯定してくれていることが嬉しい。

「ありがとうございます」

お礼を言っただけで手にする。そんな絵梨の視線の先で、幸根が腕組みした。

「なにも知らずに、生い立ちだけで可哀想と見下すとか、ブランド物の財布持ってるだけで勝ち誇るとか……、その部長の娘さんは、なかなかムカつく存在だな」

「確かに」

幸根ほどの激しさはないが、雅翔も渋い顔で頷く。

「しかしブランド物を持つてるのが、そんなに偉いのかねえ」

呆れる幸根に、雅翔がパチンツと、指を鳴らした。そして、その指を絵梨に向ける。

「手始めに、そこから始めようか？」

「え？ どこからですか？」

不思議そうに首をかしげる絵梨に、雅翔が目尻に皺しわを作つて微笑む。

「復讐だよ。その自慢大好きな部長の娘さんに、悔しい思いをさせるっていうのはどう？」

そう言われて、復讐のことを思い出した。

確かにこのままやられつばなしは辛いので、少しぐらい復讐をしたい気持ちになっている。

桃花を悔しがらせる。もしそれが成功すれば、プライドの高い桃花のことだ、しばらく絵梨と距

離をおいてくれるかもしれない。

——それはちよつと嬉しいかも。

思わず表情が明るくなる。そんな絵梨を見て、雅翔も表情を明るくする。

「でもどうやって、悔しい思いをさせるつもりですか？」

その方法が思いつかない絵梨に、雅翔が得意げな顔をする。

「今は秘密。……でも俺にいい考えがあるから、方法は任せてくれない？」

「……」

どんな方法なのか気になる。そう思いつつ絵梨は頷いた。

「さつそくだけど、絵梨ちゃん、今度の週末はなにか予定はある？」

「土曜日も日曜日も、なにも予定はないですけど……」

「じゃあ両方、俺と出かけるから空けといて」

雅翔は、そのまま待ち合わせ時間を決めていく。

よくわからないけど、なにか思いついたらしい。その証拠に、彼の端整な顔には悪巧みを楽しむような笑みが浮かんでいる。

「あの、どこに行くんですか？」

「それは、当日までの秘密」

唇に人差し指を当てる雅翔は、絵梨がいくら聞いても詳細を教えてくれなかった。

困り顔で黙り込む絵梨を見て、雅翔は楽しそうに目を細める。

その表情が本当に楽しそうなので、絵梨はその表情を壊してしまうのが嫌で、それ以上の迫及を諦めた。

「わかりました。じゃあ、楽しみに週末を待つことにします」

「うん。そうして」

微笑む雅翔に、絵梨も頷き返した。